

## 委員会だより

<10月4日(日) 14名出席>

- 【1】財務報告：98年9月度決算報告(甲斐さん)  
 ・特記事項：・ミサ献金の減少が続いている。(ミサに来る人が減っている。)  
 ・敬老会、予算15万円に対し実績は100,105円。
- 【2】議題：  
 (1) 敬老会について：  
 ・盛会裏に無事終了。準備および接待に尽力された皆様、ご苦労様でした。  
 (2) 七五三のお祝い準備：  
 ・対象者は、およそ10名位。  
 ・ごミサの前に典礼委員の方に「主旨」を言って頂きたい。(敬老のお祝のミサの反省から；阿部さん)  
 (3) 第5地区宣教委員会(9/20、藤沢教会)報告(町田さん)：  
 ・宣教活動、教会活動におけるインターネット活用の話が出た(他教会の例含め)。中和田は？！  
 ・大船教会で開催される湘南短期セミナーは、「手話付き」で行われる。330~400人を越えたら、外からモニターで見る形になる。  
 ・藤沢教会で、典礼の勉強会が開催される。日時は10/31 1:00pm-4:00で、参加費は500円。  
 (4) 教会内の下足化の件： 壮年会、婦人会各論議結果をベースに再度議論したが、山崎神父様が反対のご意向で、期間限定の試行を含め一切行わないことに決定。(継続検討も行わない。)  
 (5) 信徒名簿：  
 ・9月末日現在の名簿の原紙の作成を完了した。  
 ・バザーが終了してから、手分けしてコピーする。  
 (6) 聖書朗読の人選に関する意見(9/20壮年会席上)：  
 ・今後、当番表に、壮年会も具体名を入れずに、当該日の朝に典礼委員が依頼する形にする。  
 (7) バザー準備関連：  
 ・今後、保健所に模擬店開催届を提出。  
 ・バザー券の抽選方法に一考要。  
 ・メニューに「焼いか」が復活。  
 (8) その他：  
 ・教会学校リーダー研修会が11/23に開催される予定。

## 壮年会だより

<10月18日(日) 11名出席>

1. 財務報告(甲斐さん)  
 特記事項はないが、日曜日の献金額が減少気味の傾向がみられる。


2. 七五三(11月15日)お祝い準備  
 概ね例年通りとする。  
 3. バザー準備  
 ・賞品準備  
 ・保健所への届出  
 ・調味料等は前もって買い出しをする(9月17日、花坂委員長ほか)  
 ・バザー前日(10月24日)の作業  
 ①午前8時集合で市場へ買い出し(花坂委員長ほか)  
 ②午後1時集合で会場設営準備…テント張り、食器台配列等(最小限6人) 午後4時からミサあり  
 ・バザー当日(10月24日)の作業  
 ・食品売り場担当者等は午前8時集合で準備開始  
 ・バザー当日のゴミの分別収集を行う(環境委員会)  
 4. 教会内下足化について  
 神父様の御意見もあり従来通りとする。  
 5. 信徒会名簿の大要が出来た(小野さん)  
 6. 青少年問題を考える会  
 森脇さんに協力を願う。

## 婦人会だより

<10月18日(日) 32名出席>

- ◎委員会報告  
 ◎バザーについて  
 ・手作り品、雑貨、委託品、古着の売場の場所については 例年通りということになりました。  
 ◎その他  
 ・環境委員より、セミナーのお誘いがありました。  
 ・一粒会より、チャリティコンサートのお誘いがありました。  
 ・同志会よりお知らせがありました。  
 ・11月6日(金)10時から、なくなられた婦人会員の為の御ミサが挙げられます。  
 御都合のつく方は御ミサにあずかってください。

次回例会は11月15日(日)、次回当番はC地区です。



**バザー報告**

皆様の御尽力でバザーが無事終了致しました。有り難うございました。収益は下記の通りとなりましたので、御報告致します。(バザー委員会)

**収益 591,506 円**

## ミサ当番表 (98年11、12月)

月/日	主日	朗読、奉納	オルガン	月/日	主日	朗読、奉納	オルガン
11/1	諸聖人の日	壮年会	森田	12/6	待降節第二主日	壮年会	大宮
11/8	年間第三十二主日	青年会	大宮	12/13	待降節第三主日	青年会	岩淵
11/15	年間第三十三主日	婦人会C地区	岩淵	12/20	待降節第四主日	婦人会D地区	美底
11/22	王であるキリスト	壮年会	美底	12/24	主の降誕(夜半)	青年会	森田
11/29	待降節第一主日	婦人会C地区	森田	12/27	聖家族の主日	壮年会	大宮

※当番の方は10分前には集合して下さい。

※ご都合の悪い方は典礼委員までお申し出下さい。(萩原: Tel. 802-6258)

## 今月の予定

死者の月	11月 1日
委員会	11月 8日
七五三	11月 15日
サロン	11月 8, 22日
レジオ	11月 13, 20, 27日



第241回

中和田カトリック教会  
 広報委員会発行  
 泉区中田北1丁目9-1  
 Tel. (045) 803-6141  
 1998年11月8日



## おどろきあわてるのこと

山崎 正俊



お昼近くになったときに、電話のベルがけたたましく鳴った。台所のほうにおられるから、そちらのほうの誰かへのものだとおぼえているので、知らぬ顔をしていたら、めずらしくも、私への急ぎのもの。妹のひとりがころんで骨折し、身動きもできなくなり、やっとベッドにたどりつけ、横になったままで過ごして、救急車で入院したとのこと。弟も右肩の骨を折っていて、自分では出掛けることもままならぬとかいろいろあり、どうにもならないので、姉にたのんで見舞いに行ってもらったところだという。様子がわかったのは、留守ではないはずなのに、おかしいというので車に乗せてもらって訪ね、鍵をこじ開けて見たら、身動きできぬままに、誰かが来るのを待っていただけで、二日も食事もできぬままに、痛みを耐えていたところだった。

私もビックリしたままで、とにかく、様子を見に行くことにした。いつもは、昼食は三時をすぎたことだからと、すぐに、その病院に出掛けてみた。私のボケ方もかなりの様子だということに気付かされながら、やっと入口にたどり着けたのに、玄関はあっても、エレベータに三階がなく、受付は四階で、まごまごするだけ。301号室は真ん中に看護婦さんの部屋があって、出入口の近くで、髪が真白の小さな顔で、サンソ吸入のためのマスクをした人が妹だということがわからず、忙しそうにしている看護婦さんがこちらを見てくれるのを待っていたりした。

腰の骨が折れているとかで足を自分で動かすことも出来ず、固定されて、足の先でつりあげられ、ふつうのことなのだが、真白な布団と敷布で覆われているのだから、異様な感じで、誰だかわからなかったわけ。

私には見分けられなかったが、妹のほうからはすぐにわかったらしく、ほっとした様子で、ほえんでくれた。まっ白な、すべすべした細い小さな手をのぼして握手したままで話しかけてくるが、声に力がなくあまり聞きとれない。でも、私の云うことはきちんとわかるらしく、看護婦さんが、体温・血圧などを計りに割り込むほかは、何んのさまたげもなく話し続けた。あまり長居もできず、必要なことはしたのだが、私が訪ねるまえに姉が来て係りのお医者さんに話を聞いて帰ったばかりだと看護婦さんが云うので、あとでたしかめることにして、フラフラしながら帰って来た。7時近くになっていたかと思う。

弟から、そのとき電話がかかってきて、様子がわかり、タンノウが働かなくなっているけれど、その手術もできず、からだ弱っているのを管をさしこむこともさきのぼしされておられ、単に骨折だけのことでなかったということで、体力がいくらかもしれば、ことはそれ待ちということらしく。もう、二週間も動かすことができないままだそう。——しかたがないというわけで、弟たちは葬式のことを心配しているので、それには安心させて置き、病院の近くの教会の神父さんをお願いして、翌日の午後に病者の塗油と御聖体の授与とを引き受けていただくことにし、私もそれに同席し、気をしっかり持つなら、それに刺激されて食欲がいくらか出るでしょうし、そうすれば、回復もはやめるから、すべてはなりゆきにおまかせしてとは話しておいたのだからと思うことになる。——意外にも疲れがひどくて、おどろいたな。これは……。



## 南米旅行の思い出 (その2)

(パラグアイ、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル)

小山 利江

次の夜、Kの知人夫妻からディナーショーの招待があり、フォルクローレや民族色豊かな踊り、そしてアサダと呼ばれる豪快な焼肉料理を楽しむ。

ショーサービスもなかなかのもので、我々日本人も目に留まったらしく突然「津軽海峡冬景色」を上手な日本語で歌い上げたのにはびっくり。拍手喝采で応える。チリからきたという中学生位の一人は、この遅いショータイムに先生共々楽しんでおり、フィナーレにはホール内に輪を作ってダンスをして盛り上がる姿は、とても日本の学校生活では考えられないことではないかと思う。

ショーが引けたのは12時をとくに回っており、帰りの車中から見る外は静かな暗闇、首都アスンシオンと言っても大都会の賑わいは見られない。それでも街角になにやら異様な群れが目に入る。ヘッドライトに浮かんだのはギンギンの女性? 彼女たちは世に言うおかまのこと。思わず皆で吹き出してしまう。

時差ボケで変な時間に眠いという2人に比べ、相変わらず夜はぐっすり寝てしまうので翌朝の目覚めもスッキリ。

アスンシオンから空路アルゼンチンのブエノスアイレス(BUE)へ向かう。エセイサ国際空港では良い天気の中、パラグアイよりも浅い春を肌を感じる。ホテルへ向かう車窓からは、窓辺や花壇にシクラメン、パンジー、プリムラ、もくれん、ボケ等なじみの春の花が目に入ってくる。アルゼンチンは人口の90%以上がヨーロッパ系の住民で構成されているので他の南米諸国とは違った趣のある国という。

夜はタンゴショーへ旅行社の鈴木さんの案内で出向く。ちょうどこの夜は政府へ抗議をするための国民の意志表示として各家、商店、会社などが8時から5分間一斉に消灯するというデモにぶつかる。暗闇とまではならなかったが殆どの灯りが消えていた5分間。おもしろいデモがあるものだ。

郊外へ移転したばかりという「タンゴミオ」はかなり大きな円型の建物で客席から真ん中のショー舞台を見下ろすようになっている。分厚く大きなステーキとワインで食事をとりながら、ようやく10時を過ぎたころからショータイムに入る。レトロなバンドネオンの音色を中心に、バイオリン、ピアノ、ベースの楽団が奏でる中、スポットライトを浴びて踊る男女のダンサーの美しさと、聴き知るいくつかの名曲などで楽しい一夜となる。

翌日はタンゴ発祥の地で有名なボカ地区へ行ってみる。不朽の名作といわれる「カミニート」のモデルとなった100m足らずの路地は、原色のペンキが塗られた家並みと芸術家とおぼしき人々が絵を描いたり売ったり、バンドネオンを奏でながらタンゴを歌ったりと何とも言えない風情を表している。

とにかく広大な国で片側5車線、はるか向側に反対車線の終りがあるといった感じの道路は、7月9日大通りと命名される世界一幅のある道路(144m)とのことで驚く。

時間が許されるなら大自然のスケールの大きさを堪能したいところだが、14年前Kの御主人がマゼラン海峡方面へ南極の流水を見に行く途中、事故死をしていることもあり、茶毘に付されたBUEの地で改めて冥福を祈る。

2泊したホテルはアスンシオンとは格段の違いで、シングルルームで各々ゆっくり休む。明日はいよいよ期待と不安のボリビアへ出発することになる。



## 学会での小野寺 功先生の講演と討議 (朝日新聞 8月25日夕刊の記事より)

中和田教会の副委員長、小野寺功先生は長年にわたり「聖霊論」につき研究してこられました。また聖霊論が、日本土着の森羅万象に神がいるという考え方にもつながり、他宗派との会話の接点にもなりうることから、他宗派との交流を積極的に実践して来られました。

小野寺先生はこのほど開かれた東西宗教交流学会で、この聖霊論を中心に基調講演をなさいました。この講演は大きな反響があり、3日間にわたりこれをベースに熱心な討議が行われましたが、朝日新聞の菅原伸郎記者は、会議の様子をわかりやすく報告されていますので、以下紹介させていただきます。

### 「聖霊」を西田哲学で考える 東西宗教交流学会で超宗派の討議 「仏性」との比較論も

— キリスト教の「聖霊」とは何だろうか。解釈はさまざまだが、最近では、他宗教と対話をする場面で登場するようになった。このほど開かれた東西宗教交流学会でも、西田哲学の視点から見直す発表があり、仏教者や哲学者もまじえて論議された。カトリック教会は今年を「聖霊の年」と定めてもいる。(菅原伸郎) —

京都市で七月下旬に開かれた第十七回東西宗教交流学会で、清泉女子大の小野寺功教授は「西田哲学から聖霊神学へ」という発表をした。著書に『大地の神学/聖霊論』(行路社)などがあり、カトリックの立場からソロビヨフやドストエフスキーらのロシア思想を研究してきた。おおよそ、こんな主張だった。

「聖霊とは、私たちの外にある客観的な対象ではない。心の中に内在的に宿るものだ。それは、西田哲学の『絶対矛盾的自己同一』や『絶対無』の論理によってこそ、現代人に通じるようになる。仏教という『仏性』にも近いだろう」

キリスト教の「父と子と聖霊」の三位一体の神は、紀元325年に開かれたニカイア公会議で正統の教義となった。「父なる神は、子であるイエス・キリストを通して、聖霊によってみずからを啓示し、救いのわざをなす。三者は分けられない」とされている。

一般的な解釈では、天上の創造主は地上の人間や教会や歴史を聖霊の働きを通して動かしている。神の使者ハトがその象徴として描かれることもある。「聖霊よ、来てください」と祈る信徒も多い。しかし、この考えでは、神と人間が分かれてしまう。あまねく存在しているはずの神の力が、祈る側には及んでいないことにもなる。そんな矛盾をどうするか、神学の大きな問題だった。

西田哲学の基本的な思想である「絶対矛盾的自己同一」は、対立する二つの存在がそのまま同時に成り立つ場所、とされる。たとえば、希望も絶望も超えた場所にこそ、深く静かな平安が訪れる。「絶対無」という言葉も使われる。ともに「色即是空」「一即多」などの仏教思想、とくに禅とつながる考えだ。

小野寺説は、この東洋的な哲学を聖霊に結び付けた点で新しい。いっさいの矛盾を乗り越える深い深い次元での働き、というのだろう。これまでも「日本の神学が欧米の神学を超える可能性を秘めた提言」

(旧約聖書学者・関根正雄氏)などと注目されてきた。三日間の論議は、霊的な感動や覚醒は①神の働きかけがあって初めて心の中に起こるのか(超越的内在)②心の中に聖霊が宿っていて、それに目覚めることなのか(内在的超越)、の問いが根本になっていた。②ならば、人はだれもが悟ることができる、とする仏教の「仏性」論に近づく。

米国の出版社Tuttleから、対話集「A Zen Life of Dialogue」をこのほど出版した阿部正雄奈良教育大名誉教授が「道元によれば、動植物や山川草木自体が仏性であり、聖霊と同じとはいえない」と述べた。『無心と神の国』(青土社、共著)などで三位一体論と大乘仏教の三身説の違いを論じるプロテスタントの八木誠一桐蔭横浜大教授は「聖霊は神の働きの伝達者であり、仏教的にいえば、仏性を活性化させるものだ」と発言した。

中世以来、キリスト教界には「個人的な聖霊体験は狂信を生む」「聖霊論は異端や反体制思想に近づく」と警戒する空気があった。学会に参加した女性教授は「キリスト教の学校を卒業したが、先生に質問しても答えてもらえなかった」と苦笑した。

しかし、理詰めのキリスト教神学の中でもアニミズムにもっとも近い、とされる聖霊だ。神秘的で親しみやすいことから、硬直化した神学をよみがえらせる役割も担ってきた。エックハルトらの中世神秘主義も聖霊体験が基本にあった。現代ドイツのプロテスタント神学者J・モルトマン氏は「のちの御霊/総体的聖霊論」(新教出版社)で環境や平和の問題を考える道としても論じている。

第二バチカン公会議で現代化路線を打ち出したカトリックには、他宗教を理解するパイプ役として聖霊を見直す動きがある。ローマ法王は、1997年をイエス・キリストの年、九八年を聖霊の年、九九年を父の年、2000年を三位一体の年と定め、それぞれを学ぶよう勧めている。

小野寺教授の発表について、カトリックの本多正昭ノートルダム女子大学長は「伝統神学にまだ縛られている。三位一体論は聖書自体にあることではなく、ニカイア公会議で決まった教義にすぎない。さらに大胆に東洋的なキリスト教を模索すべきだ」と励ました。

この学会の会長で、西田哲学を研究する上田閑照京都大名誉教授も「聖霊の論議は、東西の宗教が理解し合うための核心。これからの宗教間対話には、こうした対決を含む論議こそ大事です」と締めくくった。